

大学で「教養」を身につけるということ

～美しき余剰を楽しむために～

山本 創大

はじめに、「教養」とは

「教養」とは何であろうかというテーマは日々議論されていることであり、大学生でもレポート課題などで一度は何かしらのテーマに絡めながらじっくり考えたことがあるだろう。「般教」などとよばれ、大学の1、2年次に必要単位・科目として履修するもの、基礎科目や自分とは他分野の基礎部分を「勉強」するものと混同され、そちらがなじみ深くなっている側面もあるが、このような、「教育上生まれたであろう言葉」と「教養」は、また区別すべき言葉である。(もっとも、私自身これらに気づき、知覚したのは、大学での学びによるものが大きい。)『日本国語大辞典』によると、教養とは、「学問、知識などによって養われた品位。教育、勉学などによって蓄えられた能力、知識。文化に関する広い知識」であり、英語でいうと「cultureやrefinementやliberal arts」であり、そして「リベラルアーツ」とは、大学(University <- Universitas)の起源となるところで学ばれていた「人が持つ必要がある技芸の基本、その時代において自由人として生きるための学問」である「自由七科」が元となっていることを忘れてはいけない。

37♦

このように、般教と混同され、「専門家育成の効率化のため、大学において教養科目は必要かどうか」などの議論に同時に巻き込まれがちな「教養」という言葉は、大学においてその存在感が薄れてきている危機的状況にあると感じられる。さらに近年の社会情勢(ウイルス禍)により、多くの大学で教養科目・課程が簡略化されてしまっている。しかしながらSNSなどで度々観測される議論をのぞいてみると、昨今のような情報にあふれている、答えのない問題に直面する必要がある社会において、自分の身を守るため、またはビジネス的な技術として教養力が重要であるとささやかれており、自分の意見を主張し正当化するための言葉としても「教養」が使われている様を散見するようになった。闇雲に「教養」という言葉を用いて意見を振りかざすことはあまりよろしいことではなく、それは私自身も気をつけなければいけないことであるが、とにかく、社会的に「教養のある人」というモノが強く求められていることは確かなようである。そこで、改めて「教養」とは何かを自分なりに整理し、考え、そして大学の教養の重要性を交えながら、今回のテーマでもある「教養の・ある人・ない人」とはどのような違いがあるのかを論じていく。(ここで、昨今の情報化社会では、科学技術や情報技

術も一般的な「教養」として重要となることも主張しておきたい。

私自身、「教養」はいつの時代も生きるうえで重要で、情報にあふれ、様々な要素が複雑に絡み合って構成されている昨今の社会では、殊更に重要なものになっていると考えている。ここで「教養」（を身につける）において大切なことを整理しておきたい。列举すると、「言葉などの元々を調べること」「事実を見て考察すること」「能動的であること」が挙げられる。これらのことは順序的につながっているわけではなく、深く相互につながっており、影響することである。また、それぞれにおいて「教養のある人」とはどのような状態であるかを考察していきたい。

「言葉などの元々を調べること」

まず、「言葉などの元々を調べること」から話を広げていく。文化や文明、人々の生活を形作る要素として、「言葉」の存在は非常に大きい。エミール・シオランの「祖国とは国語である」（『告白と呪詛』）ということばにあるように、言語の多様性は、文化・文明の多様性そのものである。例えば、虹の場合、日本では7色であると浸透しているが、アフリカ（アル部族）では8色であり、ドイツでは5色であり、南アジア（バイガ族）では2色である。これは色を表現する「言葉」の違いによるものであり、さらには文明の歴史などによる、色から連想される印象（impression）の影響がある。音の聞こえ方に関しても同様で、人は文明や歴史によって形成されたルール・文化に従って物事を見聞きしようとし、知覚しているということがわかる。

また、日本語の特徴として、もともと存在していた「言葉」（音）に、漢字（漢字の成り立ちや組み合わせにも意味がある。）が当てはめられて用いられているという背景、さらに、主に明治以降に他国から取り入れた概念で、翻訳語として用いられて浸透した「言葉」が混在しているという事実を忘れてはならない。したがって「言葉」の“そもそも”を理解することは非常に重要なことであることがわかる。例えば、先ほど用いた「文化」という言葉にしても、『日本国語大辞典』より由来を調べると、—「(1) 漢籍に見られる語だが、明治時代に「文明」とともにcivilizationの訳語として使用され、当初は「文明」とほぼ同じ意味であった。「文明」が「文明開化」という成語の流行によって明治時代初期から一般的に使用されていたのに対して、「文化」が定着したのは遅れて明治二〇年前後である。(2) 明治三〇年代後半になると、ドイツ哲学が日本社会に浸透し始め、それに伴い「文化」はドイツ語のKultur（英語のculture）の訳語へと転じた。それによって、次第に「文化」と「文明」の違いが強調されるようになった。大正時代には、「文化」が多用され、「文明」の意味をも包括することとなった。」—とある。この

ように、現代用いられているニュアンスにたどりつくまでに紆余曲折があり、そしてそれには理由と歴史が紐づいていることがわかる。

このように、「言葉のそもそも」を調べ蓄えながら、「歴史のそもそも」を知り、現代に存在する様々な物事への考察を広げていくことができる人が「教養のある人」と考えられる。しかしながら、“別にそこまで考察しなくても、教養がなくなってもいいじゃないか”と、まことしやかにささやく方もおられると思うので、ここから先は、現代社会において、あまり教養のないことの危険性や、教養のあることの利点なども交えながら述べていきたい。

「事実を見て考察すること」

次に、「事実を見て考察すること」についてである。これは先述してきたことに非常に結びついていることである。現代の生活に大きく根付いているSNSなどを見てみると、様々なデマや陰謀論、憶測を含む大量の情報と、事実と個人の感情をおりませた短文が飛び交っている。「炎上」という現象があるが、これは誰かが強い感情付きで、何時かに起こった出来事を拡散する現象が繰り返され、その強い感情の残像を人々が追いかけることで引き起っていると考えられる。このような時に、「言葉のそもそも」「歴史のそもそも」を知りながら考察する「考え方」を汎用し、感情の渦から一步引いた状態で「事実」や「全貌」を調べて把握することで、SNSに踊らされないようになるのではないか。はたまた、多くの人類は宗教などをよすがにし、規律・思想・正解・救いを求めてきたように、インターネットによって誰もが情報を拡散できるようになった現代において、小規模化かつ多様化した有名人信仰・専門家信仰はとどまるところを知らない。これによって先述した「炎上」のような出来事や人々の盲目的な行動が助長されていると考えられる。そこで、これまで述べてきたような、「事実を見て考察すること」、教養的な「考え方」が重要になるのである。他人の感想ではなく、確かに存在した「事実」をよすがとすることで、自分の軸を持った理性的な判断や理解が可能になるのではないかと考える。逆に言うと、述べてきたような教養がないと、情報の渦に巻き込まれ、非常に困ったことになるだろう。

「能動的であること」

そして、「能動的であること」である。「教育」と「教養」の大きな違いは、受動的であるか、能動的であるか、である。能動的に、本を読む、音楽・映画を鑑賞するなど、様々な文化や歴史、芸術に触れ、そして感じ取ったものや現在の知識をもとに、まるで元来のスポーツのように「頭」を動かして楽しむことが「教養」なのである。そう考えると、“大学の教養科目は専門分野を学ぶに於いての遠

回りに見える”、“芸術などは余剰であるから不要”などと言う主張は、ほとんどの人が「自由人」として生きている現代においては非常に的外れであることがわかる。好奇心を持って芸術などに触れることで「教養」を身につけ、それを資本にして美的なモノや芸術を深く楽しむことで、心の拠り所をつくることができ、広い意味で文化的な生き方ができるのではないかと考えられる。

誰しも幼いころに見た映画を改めて鑑賞すると、印象がガラッと変わったという経験があるだろう。常に“そもそも”に意識を向けながら「教養」を蓄え続けると、また違った作品の見え方、楽しみも見つかるのだ。例えば、邦画と洋画からは、根付いている宗教の違いによる作風の違いがあると考察できる。「未来」やタイムスリップをテーマにしている作品の場合、邦画では仏教の「因果応報」のような考え方が反映されており、未来（結果）は今の行動（原因）によって変えることができる（常に変わっていく）という設定が多いと見受けられる。一方、洋画では基督教の「運命論」のような考え方が反映されており、現代の行動に拘らず、予知された未来としての結果は変わらずに起こってしまうという設定が多いと見受けられる。また、『千と千尋の神隠し』や『風の谷のナウシカ』に代表されるスタジオジブリ作品は、設定年代における日本の時代背景や、「神道」あるいは「アニミズム思想」という言葉で表されている日本的な考え方が物語に直結していることが考察できる。このように、芸術作品を、作者の思考なども含めて、奥深く堪能でき、さらにその感想を思い通りに言語化できるようになるのも「教養」の範疇であり、「教養のある人」とはそのような人であると考えられる。

◆ 40

これらの「自分の頭を使って考えること」で生まれる興奮を得るのも大学の「教養」による重要な要素であり、これを経ないと、先述したようなデマや陰謀論に踊らされるような結果になる可能性が高まる。

おわりに

終わりに、「教養のある人（教養的な考え方を持つ人）」の利点を整理する。「教養のある人（教養的な考え方を持つ人）」の最大の利点は、連想的な知識の引き出しを脳内に持ち、あらゆる分野の人との会話を広げていくことができる点である。また、複雑な要素が絡み合い構成されている現代社会において、どのようなことがあっても柔軟に対応し、余剰を見つけて、もしくは余剰をつくり、仲間をつくり、しっかりと、まさに文化的に生きていくことができるという点である。そのような「教養のある人」だと思われるように、これからの人生をしっかりと歩んでいきたい。